
恋 Ren

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋 Ren

【ZPDF】

Z7398M

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

莫大な富を受け継いだために、生涯に渡つて命を狙われ続ける少女。その孤独に寄り添い、彼女を守るのは、『感情』をプログラミングされたandroイドの少年だった。狂氣と純情の狭間で搖らぐ、ふたりの禁斷の恋。【短編連作】

吹き荒れる銃声の嵐は、いつこうじやむ氣配を見せなかつた。それどころかますます激しくなつてきている気がする。あたしたちが盾にしている壁は、きっと弾痕だらけの無惨な状態になつてゐるに違ひない。このまま銃撃戦を続けていたらそのうち崩れてしまふのではないだらうか？ そうなつたらおしまいだ。

耳の奥が痛い。頭の芯が痺れるような、鈍い感覚。あたしは頭を抱えてうずくまりながら、ひたすらこの状況から解放されることを願つた。

早く、早く終われ。

「 大丈夫ですか、沙雪」

ふと、銃声とは比べものにならないほどやわらかな声が降つてきた。

あたしは無意識に詰めていた息を吐くと、少しだけ顔を上げた。気遣わしげに覗きこんでくるガラス玉のような瞳と視線が合つ。思わず泣きたくなつてしまい、あたしは眉を歪めた。

「 ……シロ」

名前を呼ぶと、少年は片手を伸ばし、そつと頬に触れてきた。ぬくもりを感じさせない、どこか無機質な指先に劣るよう蕪でられる。

優しく、ほんの少し切ない感触に、あたしは目を伏せた。

「 ……気持ち悪い」

「 もう少しだけ我慢してください。すぐに終わらせますから」シロが小さく微笑んだ氣配が伝わってきた。

今更のように彼がそばにいたことを思い出す。強張っていた体が少しだけゆるんだ。

「 大丈夫です。あなたは僕が守ります」

この一年間で幾度となく聞かされた言葉。宣誓のよろに厳かな。

一瞬、爪先まで沸騰するような歓喜が胸を満たす。けれど熱はすぐに戻って、代わりに苦い罪悪感が広がった。

どんなに嬉しくても頷けない。シロに対する後ろめたさがそれを許さない。

「……ごめんね」

いつだって、返す言葉はひとつだけ。

シロの指先が止まる。

「……謝らないでください」

ささやく声は、静か。

「僕は、あなたを守るために造られたんですから」

それはどこまでも甘美で、悲しい事実だった。

空気の唸り^{ひきがね}がいつそうひどくなる。シロの指先が離れていった。再び引鉄^{ひきがね}に指をかけ、無垢としか言い様のないほど美しい双眸を冷たく敵に向いているに違いない。

シロが造られ、そして存在する、ただひとつの理由のために。

あたしの記憶のなかに父親という人は存在しない。顔を見たことも声を聞いたこともない。

なぜ父親がないのか。小さな頃から何度も母に尋ねたけれど、結局教えてもらえないまま十四歳のときに死んでしまった。

すべてを知ったのはそれから一年が過ぎた一年前。あたしの前にシロが現れた、あの日。

私生児。

あたしはいわゆる身分違いの恋の末に生まれた、公では認められない子どもだったらしい。名家の後継ぎだった父と使用人だった母。お決まりのようにふたりの仲は引き裂かれ、母は父の許から去らなければならなかった。

そのときすでに、母の胎内にはあたしが宿っていた。母は気づい

ていなかつたのか、それとも故意に黙っていたのかはわからない。けれども母があたしを産み、苦労しながらも育ててくれたのは事実だ。

父は長い間、母の行方を探していた。どれほど周囲に言われようと結婚せず、新しい恋人も作らなかつたらしい。そうして手がかりを掴めないまま歳月が流れ、やがて床に臥すようになつてしまつた。ようやく母の　あたしのことがわかつたとき、すでに余命いくばくもない状態だつたらしい。そしてあたしを引き取る間もなく、逝つてしまつた。

あたしに遺されたのは莫大な財産と、一体のアンドロイドだつた。ヒューマンタイプとも呼ばれる完全自律式の人型ロボット。現代の科学技術の粋を集めて造られた、人間のように自ら考え行動し、感情すら持つ機械じかけの少年。それがシロ。

父の遺産の唯一の相続者であるあたしは、たくさんの人間から命を狙われる可能性がある。父はそれを危ぶみ、あたしの護衛としてシロを造らせたらしい。

大丈夫です。あなたは僕が守ります

一年前のあの日、途方に暮れたあたしに手を差しのべてシロは言った。見つめてくる瞳は透きとあるようで、言葉を失うほどまつすぐだつた。たとえ作りものとしても、そのまなざしはあまりにもきれいで、目を逸らせなかつた。

彼の手を取つた瞬間、あたしはきっと魅せられたのだ。

あの日から、あたしたちはずっと一緒にいる。

膝の裏がくすぐつたい。

背中に回された手を妙に意識してしまう。あたしはできるだけシロから身を離そと必死だつた。

「沙雪、もう少し寄りかかつてください。でないと落としてしまい

ますよ」

困ったようなシロの声がため息とともに頬にかかる。あたしは居心地悪く視線を上げた。

「ねえシロ、やつぱり下ろして。ひとりで歩けるから」

シロは滑らかな眉間に皺を寄せた。

「何を言っているんですか。腰が抜け立てなかつたくせに」

「もう平氣だつてば」

あたしはシロに『お姫様抱っこ』をされていた。

銃撃戦が終わっていざ脱出しようという際、あたしの足からはすっかり力が抜けてしまっていた。シロはあたしが立てないと判断するど、有無を言わさず抱き上げた。

当然、シロの整つた顔が目の前にある。澄みきった瞳に至近距離から見つめられて落ち着かない。

シロは眉間の皺を深くすると、ぐいっとあたしの肩を引き寄せた。自然とシロの肩口に頭を預ける姿勢になる。

「シロっ」

「いいから

「少しもよくない。

思わず睨むと、彼はふいと前を向いてしまった。背中と膝の裏を支える両腕に、更に力がこもる。

「シロつてば

返答なし。

……お手上げだ。

シロはときどき頑固になる。普段はあたしの意見を尊重してくれるので、いつもときは梃子でも動かない。

あたしはしようがなくシロに体重を預けた。

「……重いとか言つたらぶん殴るからね」

悔しまぎれに咳くと、ちらりと一警を投げて寄越した。形のいい唇がそつと綻ぶ。

「まさか。沙雪は軽く見えるくらいです」

どうしてそんなに優しく、嬉しそうに笑うのだ？

瑕疵のない横顔を見上げ、あたしは目を細めた。色素の薄い頬を走る傷痕。きっと敵の銃弾が掠めたのだ。

胸の奥が、棘に刺されたように痛んだ。

「……ごめんね、シロ」

笑つたり怒つたり、そこにある心のどこか人と違つといつのだろう。ただ器^{からだ}が機械というだけで。シロは生き方さえ定められ、あたしに縛りつけられている。

「痛かつたよね、怖かつたよね。……『ごめんね』

シロはあたしを守るために造られた。それはどうしようもない事実で、けれどシロ自身が望んだわけではない。

シロは苦痛を知っている。恐怖を知っている。心があるのでから。

それを理解しながら彼に盾たることを強いるあたしは、最低だ。

「……沙雪」

沈黙していたシロが名前を呼んだ。いつもより声が低い。シロがこちらを向いた瞬間、あたしは何、という答えを飲みこんでしまった。

まっすぐにあたしを射る、透明な双眸があつた。

あの日と同じ。

「どうして沙雪は謝るんですか？」

「どうして、って……」

「言いましたよね、謝らないでくださいって。僕はあなたに謝つてほしくなんかない」

無機質な光の反射の奥で燃える、まぎれもない激情の炎。あたしまで焼き尽くされてしまいそうな。

ああ。シロは、生きているのだ。
美しかった。

あの日よりもっと、たとえよもなく美しかった。

「僕はあなたを守るために造られたんです。そのために存在するん

です。なのにあなたに謝られたら……僕は、あなたのそばにいる理由を失つてしまつ

シロは苦しげに表情を歪めた。少し掠れた声で、沙雪、ともひつ一度名前を呼ばれる。

「謝らないでください。僕からあなたのそばにいる理由を取り上げないでください。……僕はあなたのそばにいたい」

懇願するようシロはわざわざく。

涙がこぼれそうだった。

「僕は、あなたを守りたいんです」

あたしは堪えきれなくなつて目を閉じた。

それでもはつきりと、シロの視線を感じじる。

「…………シロは」

声が震えた。

瞼に力をこめ、それからそっと持ち上げる。まじめしつわづかな想いを押しとどめながら、訊いた。

「シロは……本当にそれでいいの？」

シロの瞳は揺らがなかつた。

彼はふわりと微笑んだ。まるで光そのもののよくな、まぶしいほどまつさらな笑顔。

「ねえ、沙雪。僕は幸せです」

胸が震えた。

嘘や冗談では真似できなこほど甘い、こつれ毒になるほど甘い言葉。

堰を切つたように溢れ出した感情の奔流に、溺れていく。息さえできないほど。

「僕はあなたを守れて、あなたのそばにいたられて、幸せです」

シロの声は陶酔してこるよくなれ思えた。

あたしは醜い。

喜んではいけない。シロのためを思つなら突き放すべきなに。

シロがどれだけ傷ついているか知つてゐるのに。

手を、放せない。

『ごめんね』と言いながら、シロに幾重にも鎖を巻きつけていた。『あたしを守る』という理由の鎖を、彼を離さないためだ。

あたしのそばにいたせるために。

「…………、『ごめんね』

狂おしいほどに幸福感と、絶望したくなるような罪深さに喘ぎながら、あたしはうわ言のようにくり返した。

「『ごめんね、シロ。』『ごめんなさい。』……」

解放してあげられなくて、『ごめんなさい。』

あたしは手を伸ばし、シロの首にかじりついた。しつかりとした広い肩に顔を埋める。

シロは何も言わず、ただ微かに笑ったような気がした。

もう手遅れだと気づいてしまった。

きっと抜け出せない。あたしも シロも。

恋といつもの、この縛めから

狂恋 Kyoren

血のにおいは人を狂わすところ。

あまりに多くの血に染まりすぎた人間は、やがて血のにおいに快感を覚えるようになるらしい。彼らにとって、赤い血の色を目にすることこそ至上の悦楽なのだそうだ。

とうてい理解できそうにない話だ。

僕の両手は拭えない血にまみれているが、血のにおいを心地よく思ったことなんて一度もない。何度嗅いでも吐き気がするような、汚らわしいものでしかない。

僕が血のにおいに狂うことはないだろう。なぜなら。

「ひつ、あああ

笑いたくなるほど情けない悲鳴だ。なんとも耳障りで、僕はためらうことなく足の裏に力をこめた。

「きんっ、と骨の碎ける感触が、乾いた音と一緒に伝わってきた。

「あ、あ、ああ、あああ ッ！」

足元に倒れた男が絶叫する。涙と涙でじぶじぶになつた顔に浮かぶ、驚愕と恐怖。

見慣れすぎて、今更なんの感慨も浮かばない。

「あつ、あつ、あつ……」

喉を鳴らして喘ぐ男は、手の甲に張りつづくほどきれいに折れた指に体を震わせた。僕は男の手を踏みつけたまま、その充血した目を覗きこむ。

「痛いですか？　だけど彼女を狙つてこれで済むなら、安いものでしょつ？」

本音をいえば、細切れどころかなんの物体なのかわからなくなるくらい切り刻んでやりたいが、この男まで殺してしまっては『伝言』を伝えられなくなってしまう。

そのためにはわざわざ歩いて帰れるよう、両手を潰すだけにとどめ

たのだから。

僕は男の手を踏む足にかける体重を少しづつ増やしながら、血の氣の引いた男の耳にささやいた。

「あなたたちの雇い主に伝えてくれますか？」

「な、あ、なにを……」

僕は優しく微笑んだ。

「こんなにも熱烈なご使者をお寄越しになるほどお呼びならば、今度はぜひこちらからお伺いさせていただきます、と」

直訳すれば「次はない」。

男はひゅっと息を呑んだ。わななく唇が、言葉にならない掠れ声を洩らす。

「さてと、それじゃあ僕はこのあたりで失礼します。くれぐれも伝言のほう、よろしくお願ひしますね」

僕は背筋を伸ばすと、ぐるりとあたりを見回した。そんなことはないだろうが、一応『取りこぼし』がないかどうか確認だ。

ガラスの割れた窓から微かな月影が射しこむ薄暗い廃墟。ほとんどの残っていないがらんどうのあちこちには、いびつな形をした塊がころじろと転がっていた。

それはかつて人だったモノ。

体のどこかしらが失われた人間の屍。引きちぎられた手足、割れた頭から飛び散った中身。

月明かりにぬらぬらと黒光りしているのは、海のように広がる血だ。立ちこめるにおいては、やっぱり不快極まりない。

きっとだれもが悪夢のようだと叫うに違いない惨状を作り出したのは、他でもないこの僕だ。

我ながらひどい光景だと思うが、だからといって容赦する必要はどこにもない。彼女を殺そうとしたやつらにやる慈悲なんて持ち合わせていいない。

僕のすべてでは彼女のために在る。彼女を守ること。それが僕の存在する意味であり、理由であり、価値なのだから。

どうやら確認するだけ無駄だったらしい。僕はため息をつくと、さつさとここから立ち去ろうと思つた。

早く、彼女の許に帰ろう。

「……つ、ば」

ふと足元で声が上がつた。

まだ用があるのかと男を睨みかけた僕は、「ばつ、け、もの！」

……一拍ののち、再び男の手を踏みにじつた。

もう一度と使いものにならなくなるほど骨が粉碎される音と、断末魔にも似た男の叫びが、からっぽの廃墟に響き渡つた。

化けものと呼ばれて悲しいとは思わない。

そういう風に見られてもしあうがないからだ。僕は人間どころか生きものすらない。ただ、彼女と違う存在だということを忘れるなと言わわれているようで腹立たしかつた。

僕はアンドロイド。

ヒューマンタイプとも呼ばれる完全自律式の人型ロボット。現代の科学技術の粋といるべき、『心』を持つた機械人形。

正式名称は『C-60』。だが彼女はそれを嫌つて『シロ』と呼ぶ。

だから、僕の名前はシロだ。

僕が造られたのは、一年と少し前。彼女の父親がこの世を去る直前だつた。

彼女　沙雪は、世界経済に大きな影響力を持つ名家の後継者だつた。身分違ひの恋愛の末に生まれた彼女は、本来なら公には認められることのない庶子に過ぎない。だが沙雪以外に直系の血を引く者はなく、彼女は否応なく表舞台へと引きずり出されてしまった。

人の欲望は、闇よりなお昏く深い。途方もない富と権力を受け継

いだ沙雪は、この先ずっと死と隣合わせの人生を歩んでいかなければならぬ。それを危ぶんだ沙雪の父親は、盾となり剣となつて娘を守る存在を造らせた。

それが、僕。

僕が完成して間もなく、ずっと病床にあつた沙雪の父親は亡くなつた。すでに母親を喪つていた沙雪は、ひとりぼっちになつてしまつた。

沙雪にはじめて会つた日のことは、今でもはつきりと憶えている。母親との思い出が詰まつた小さな家に、ひとり残された女の子。胸を搔きむしりたくなるような、さびしげな瞳。突然突きつけられた運命に戸惑い、怯えていた、迷子のような表情。

……守ると言つた僕に、ありがとうと震える声でささやいた笑顔と、じぽれ落ちたひと粒の涙。

差しのべた手をそつと握り返されたとき、僕は誓つた。

沙雪を守る。何があつても、決してこの手を放さないと。

透きとおるような月の光が、夜の底に沈んだ廃墟を包みこんでいた。

光の描き出すやわらかな陰影を踏みながら、僕は部屋の隅でうずくまる少女に近づいた。

「沙雪」

名前を呼ぶと、彼女は勢いよく顔を上げた。大きな目を殊更大きく見開いて、よろめきながら立ち上がる。

「シロ!」

転がるように駆け寄ってきた沙雪は、僕の首にかじりついた。僕もその背を支えるように腕を回そうとして、寸前でどじまる。

「シロ、無事でよかつた……」

安堵のこもつた咳きに、胸の奥から熱くなつていいく。そのまま抱

きしめたくてしようがない、が。

「大丈夫、なんともありませんよ。……すみません、沙雪。少し離れてもうえませんか？」

「え……」

茫然とする沙雪に、僕は苦笑を返した。

「このままだと、あなたまで汚れてしまつ」

僕の全身、特に両手は返り血に染まつっていた。あんなやつらの血で沙雪の身を汚したくない。

「……何、それ」

沙雪はきつく眉根を引き絞つた。ああ、怒らせてしまった。

「あなたにこんなことをせておいて、あたしにはきれいなままでいろつていつの？」

首から細い腕が外されたかと思うと、あつとう間に血まみれの両手を奪われる。

「さゆ……」

「ふざけたこと言わないで！」

睨んでくる双眸が月明かりを受けて潤んだように光る。もしかして泣いていたのだろうか。

泣いてくれたのだろうか、僕のために。

「あなたひとりに血を被らせるなんて、できるわけないじゃない！
守られるだけなんて、そんなこと……」

沙雪は声を詰まらせるとい、僕の両手をきつく握りしめた。ぬるぬるとした感触越しに伝わる、彼女のぬくもり。

それが嬉しくて愛しくて、僕は小さな手を振りほどけなかつた。

「……あたしは、なんにもできないけど」

俯いた睫毛が震える。沙雪を形作るものは、何もかも纖細で美しい。たとえ髪の毛一本ですら損なわれるのは許しがたい。

だから僕は何度でも赤い血の海に沈むことができる。化けものと罵られよつとかまわずにいられる。

沙雪が「シロ」と呼んでくれるから、それ以外の呼び名なんて気

にならぬのだ。

「だけどせめて、シロが背負つてゐるものを分かち合いたい。シロが抱えてる重みを少しでも軽くしたいの」

僕は人間ではない。人の手で造り出された、偽りのいのちだ。
だが沙雪は、僕に心があると認めてくれた。

たとえ体は機械でも、人と同じ、人そのものの心を持っていると。
僕を僕たらしめているのは、沙雪だ。

僕の喜び。僕の幸せ。

僕の心。

「……そう思つてくれるだけで充分ですよ」

僕は沙雪の手を握り返した。真っ白な手が赤く汚れたことにひどく罪悪感を覚えたが、同時に仄暗い歡喜に満たされる。
まつさらな処女雪を踏みつけるような思い。背徳から滲む醜い快感。

所詮ボディガードのアンドロイドにしか過ぎない僕が、これほどまでに心を傾けてもらえるなんて不相応だ。僕は『人』ではなく『物』なのだから。

だが、それがなんだというのだ。

つないだ手を放すつもりなんて更々ない。僕が僕である限り、あの日の誓いを守りとおす。

たとえこの想いがプログラミングされたものだとしても、ここままで育て上げたのは僕だ。他のだれのものでもない、僕だけの。

「沙雪」

「……なあに?」

「抱きしめて、いいですか」

沙雪は不思議そうに目を瞬かせ、それからはにかむような笑みを浮かべた。

「うん」

きつと世界中で僕ほどの幸せ者はいない。

華奢な体をできるだけ優しく包みこむ。沙雪は当然のように身を

寄せてきた。血のにおいが染みついた、冷たい機械の体を厭いもせず。

僕の腕の中には奇跡があった。この世でただひとつそれを手放すのはあまりに惜しくて、抱擁という檻の中に閉じこめた。

沙雪は知らない。

僕のなかにある、やつらの血よりも汚らわしい感情を。満腹を知らない飢えた獣のような、凶暴で貪欲な想いを。

それを否定するつもりはない。

どこまでもどこまでも、墮ちるところまで墮ちればいい。沙雪を道連れにすることの罪深さを知っているが、もう迷にもためらいもなかった。

血において狂う以前に、僕の心はとっくに蝕まれていたのだ。恋といつ名の、狂気に。

恋・哀・恋 Ren·ai·Ren (1) (前書き)

五つのお題によるSSW連作。

【ただそこにありたいとねがうのは】

X 罪を罪とも思わないのではなく、僕が其処に在りたいと想う、純で粹なる願いであつて

X X 愛しいと、恋しいと泣けば、君はそれを許してくれるのだろうか

X X X 指先から零れる熱だけを搔き集めて、縋り付く涙が溢れてしまつて

X X X X 君に、君だけに。溺れて零れて焦がれて終には
X X X X X そう。願う事だけ。それが僕に残された只一つのほんと

Title by 摺らぎ／flickers . (http://m-pe.tv/u/?flickers)

恋・哀・恋 Ren・ai・Ren (1)

X 罪を罪とも思わないのではなく、僕が其処に在りたいと想つ、純で粋なる願いであつて

今日の彼女はいつも以上に頑固だつた。

「後ろを向いててください、沙雪。もしくは、しつかり口を塞いでいて」

「いや」

どんなに懇願しても、僕のただひとりの主は顔を背けよつとも瞼を閉じよつともしなかつた。顔を蒼白に染め、震えを押し殺すよつにぎゅっと僕のシャツを握りしめる。本当は逃げ出したくてたまらないくせに。

「沙雪、あなたに見てほしくないんです。あなたの口が汚れてしまう」

「それが何、そんなのシロの勝手でしょう。あたしは見たいの！」

沙雪は悲鳴を上げるように怒鳴つた。その大きな目が潤んでいることに気づき、僕はわずかなためらいを捨てた。

「すみません、少し手荒くなります」

「え」

彼女の細い肩を掴んで強引に引き寄せる。片腕で頭を抱えこむように視界を塞いだ。

「シロ！」

暴れる沙雪を押さえこみ、僕は目の前に横たわる刺客に銃口を向け、引鉄を引いた。

銃声が大気を震わせ、すでに虫の息だった男の体が大きく跳ねた。断末魔にならない微かな声を洩らし、やがて男の生体反応は途絶えた。弛緩した体の下から赤い液体が静かに広がつていいく。

沙雪はもはや抵抗せず、ただシャツを掴む指に力をこめた。僕はそっと彼女の頭を解放した。

「苦しくなかつたですか？」

顔を覗きこむと、いつの間にか涙を落としていた瞳が茫然と見上げてきた。なんで……、と沙雪は唇だけで呟いた。

僕は彼女の濡れた頬を拭いながら答えた。

「言つたでしよう。あなたに見てほしくなかつた。あなたの目を汚したくなかった」

優しい沙雪は、僕が血に染まることを何より厭う。それが僕の存在理由だというのに、僕がこの手でだれかの命を奪うたびに悲嘆に暮れる。僕が負つて当然の業を自分にも分けてくれと懇願する。

なんて愛しい、憎らしい人。

貪欲な僕が望むのはそんな優しさよりも、もっと。

「あなたの瞳に僕以外のものが映るなんて、我慢できない。僕だけを見てください、沙雪。あなたの瞳の先にいるのは僕だけだと誓つてください」

僕の瞳の先にはあなたしかいなによう。

ささやきとともに熱を帯びた瞼に口づけを落とすと、沙雪は小さく息を呑んだ。驚きに硬直する華奢な体を抱きしめる。逃がさぬよう、追い詰めるよつこ。

困惑に喘ぐ彼女が、やがて弱々しくシャツを引っ張る。その瞳に浮かぶ自分の姿に、僕は薄く微笑んだ。

じつして僕はまたひとつ、罪を重ねる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7398m/>

恋 Ren

2010年11月26日09時47分発行